

## ここに光ありーすべての祈りを引き受ける、福王寺朱美の創造物

ジュエラーを営む家に生まれた福王寺朱美は、朴訥な原石のどこに、煌びやかな光源が潜んでいるのか探り当て、カット、研磨する職人達と共に仕事をする両親の姿と接しながら、多感な少女時代を過ごした。

20代で若き日本画の俊英に嫁いだ彼女は、親子鷹の如く画布に向かう父子のために日々絵具を溶き、大小様々な筆を整えていた。日本画で使う顔料の多くは鉱物を微細粒子にしたものであり、彼らが得意とした「月光に照らされる幻想的な森」にはマラカイト(孔雀石)の「松葉緑青」が、そして「雄大なヒマラヤ連峰」にはラピスラズリによる「瑠璃」や、アズライト(藍銅鉱)由来の「群青」が欠かされなかった。彼女は絵具を練り上げる指先を通じて、刻々と変化する天候や気温を計り、貴石や宝石と身体的な会話を重ねながら、顔料や膠、そして水の塩梅を見定めていたという。

その後、大きな離別を機に意を決した福王寺は、自らの名を冠したジュエリー・ブランド「AHKAH」を立ち上げる。「世代を超え、国境を超え、時代を超えてもなお、美しいものとして永遠に愛されていくジュエリーを作り続ける」という理念を掲げた同ブランドのジュエリーは、瞬間に本物志向を有する女性達の心を虜にした。そして、男女雇用機会均等法改正や育児・介護休業法の施行などを背景とした、女性の社会進出と歩調を合わせるように、AHKAHのビジネスも拡大の一途を辿っていったのである。

肌馴染みの良いゴールドに、隙間なくダイヤモンドを埋め込んだ「バヴェダイヤ・シリーズ」は、指先や首元で小さな銀河の如く煌めき、自立した女性達を華やかに彩る。優美な中にもしなやかな強さを秘めた女神ヘーラーのように、それらは身に着けた人を守り、自信を与える特別な存在となっていた。福王寺が手掛けたジュエリー・デザインは、造形美の追求のみならず、すべての女性を輝かせたいと願う、彼女自身の堅固な意志を形象・結晶化したものであった。

ジュエリー・ビジネスから身を引いた福王寺が、次に挑戦したのは宝石や鉱物を用いて「すべての祈りを引き受ける存在」を創造することであった。2021年6月に彼女は「Future Zen(未来の禅)」展で、その成果を初めて世に問うている。「禅というと宗教的だと思われるかもしれないが、『未来の禅』とは、宗教や国境がない解放された世界のこと。苦しかったときに座禅に行ったことがある。毎日瞑想し、辿り着いたのが平和な心だった」※1と彼女はその真意を述べている。展覧会に訪れた人々は、それらを「アート作品」、「工芸」あるいは「未来の仏壇」などと思いの言葉で表現していた。

現在、日本は尖閣諸島と竹島、そして北方領土返還という領土に付随する問題を抱え、また、世界へと目を転じれば、領土や宗教、民族問題が複雑に絡み合ったロシアによるウクライナへの軍事侵攻やガザ紛争など、国際情勢はますます混迷の度合いを深めている。特定の宗教や国家あるいは国体に帰属しない、多種多様な人々の祈りを引き受ける対象(物)こそ、VUCA※2な現代社会において私たちが切望する厳存であるといえまいか。

さて、モダニズムを牽引した評論家であるクレメント・グリーンバーグ(Clement Greenberg, 1909

～94年)は、絵画における「純粋性＝平面性＝三次元イリュージョンの排除」※3を説き、同時代に活躍したハロルド・ローゼンバーグ (Harold Rosenberg, 1906～78年)は、「アクション・ペインティング」※4において「キャンバスが、実際のあるいは想像上の対象を再生し再現し分析し、あるいは”表現する”空間であるよりむしろ、行為する場としての闘技場に見えはじめた」※5と唱えたのである。福王寺の「すべての祈りを引き受ける存在」が仮にアート作品であるとするならば、日本画家と二人三脚で作品制作に携わった彼女は、「すべての祈りを引き受ける存在」という作品により美術史を平面の純粋性から解放し、立体/彫刻へと可逆的に捉え直したと思惟することもできよう。

他方、ハプニングを創始したアラン・カプロウ (Allan Kaprow, 1927～2006年)による独自の空間に対する参与＝ある種のパフォーマンスは、実験音楽家ジョン・ケージ (John Cage, 1912～92年)を通じて、仏教学者・鈴木大拙 (D.T. Suzuki, 1870～1966年)の教えを間接的に受容することで、ジャクソン・ポロック (Jackson Pollock, 1912～56年)の「アクション・ペインティング」と「禪」の双方を取り入れ生み出されたと考えられている※6。こうした先達に鑑み、“祈り”という行為に着眼して福王寺作品を俯瞰すれば、「未来の禪」を顕現するためのアクションあるいはパフォーマンス共鳴増幅装置として領得することも、決して牽強付会とはいえない。彼女は常に美術史というマクロコスモスと、私小説的な宝石を巡る物語としてのマイクロコスモスを照応させながら、創作に身を投じてきたのである。

どれほど科学技術が発達したとしても、最適解を求める人工知能に祈りは理解できないであろう。世のあらゆる事象が機械に取って代わられる現在、祈りこそは私たち人間に残された貴重な営為の一つである。ここに光ありー光を宿し、放つ福王寺朱美による創造物は、祈りを通じて「人新世」※7に謳い上げる高らかな人間賛歌といえよう。

※1:以下より引用。

益成恭子「『アーカー』創業者の福王寺朱美が宝石や鉱物で描く禪の世界」『WWD JAPAN』

<https://www.wwdjapan.com/articles/1227377>

2025年3月2日閲覧

※2:Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性)という4つの言葉の頭文字をとった造語で、社会を巡る環境の複雑性が増大する中で、想定外のことが起きたり、将来の予測が困難だったりする「不確実な状態」を指す。

以下を参考にし、一部を引用。

「用語解説 VUCA」野村総合研究所公式 Web サイト

<https://www.nri.com/jp/knowledge/glossary/vuca.html>

2025年3月2日閲覧

※3:以下を参考にし、一部を引用。

Clement Greenberg, "Art and Culture : Critical Essays" Beacon Press, Boston, 1965,

pp.208～229

クレメント・グリーンバーグ『アメリカ型』絵画』『グリーンバーグ批評選集』藤枝晃雄他訳、勁草書房、2005年、111～140ページ

※4:ローゼンバーグは、ジャクソン・ポロック (Jackson Pollock, 1912～56年) らのパフォーマンス的な描画行為を、「アクション・ペインティング」と名付けた。

以下を参考にし、一部引用。

Harold Rosenberg, 'The American action painters', "Art News" vol.51, no.8, Dec. 1952

※5:以下より引用。

ハロルド・ローゼンバーグ「2. アメリカのアクション・ペインターたち」『新しいものの伝統』東野芳明、中屋健一訳、紀伊國屋書店、1965年、23ページ

元典:Harold Rosenberg "The Tradition of The New" Da Capo Press, 1994, pp.25～26

※6:参考

拙著『現代美術史における前衛書のリポジショニング』思文閣出版、2022年、123ページ

尾崎信一郎「革新としてのアクション・ペインティング」『絵画論を超えて』東信堂、1999年、60～61ページ

※7:人類の経済活動や核実験などによる環境変化が、小惑星の衝突や火山の大噴火に匹敵するほど地質学的な変化を地球に刻み込んでいることを表す。

ノーベル化学賞を受賞したパウル・クルツツェン (Paul Jozef Crutzen, 1933～2021年) らが、2000年に提唱。

参考

「地球史に人の時代現る 『人新世』環境に大きく影響」『日本経済新聞』2023年8月14日

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCD318BEOR30C23A7000000/>

2025年3月3日閲覧